

## 宇部市総合計画審議会（第6回）議事録

日 時 平成21年5月28日（木）13：30～15：30

場 所 宇部市総合福祉会館 2階ボランティア交流ホール（大）

### 出席者

#### （委員）

光井一彦 玉重彰彦 横屋幸児 田辺龍夫 有田信二郎  
黒高満義 藤重清美 杉永美佐子 三浦房紀 松崎益徳  
西村伸子 脇和也 北野洋子 三原節子

#### （事務局）

総合政策部長 芥川貴久爾 同部次長 小川 徹  
新総合計画策定室長 廣中昭久 同室長補佐 河村真治 同室主査 篠原 功  
総合政策課主任 福永俊明

#### （コンサルタント：ランドブレイン株式会社）

田中元清 石村壽浩

#### （宇部市新総合計画策定本部専門部会正副部会長）

都市開発部次長 内田英明  
健康福祉部次長 岡田利三 健康福祉部次長 滝川洋子  
教育次長 杉本繁雄 都市開発部次長 佐々木俊寿

### 欠席者

#### （委員）

倉重龍昌 上村昭義 中野朋子 中野リエ子 篠田佳代子  
千葉泰久

### 一般傍聴者

3人

## 1 辞令交付

（事務局） 本日は、御多忙のところ御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

まず、会議に先立ちまして、このたび委員の交代がありましたので、御報告します。

宇部市PTA連合会から選出された園委員さんが辞任され、その後任として、杉永委員さんを任命させていただくことになりました。

それでは、芥川総合政策部長から辞令を交付いたします。

（ 辞令交付 ）

(事務局) では、恐れ入りますが、杉永委員から一言自己紹介をお願いします。

(委員自己紹介)

## 2 会長あいさつ

(事務局) それでは、ただ今から、宇部市総合計画審議会の第6回会議を始めます。  
本日も、市の専門部会の正副部会長が会議を傍聴させていただくことを御了承  
いただきたいと思います。

それでは、初めに、光井会長からごあいさつをお願いします。

(会長) こんにちは。世の中なかなか騒動が落ち着きませんが、景気も底を突いたとい  
う新聞記事が出始め、新インフルエンザもあまり大きくなって済みそうです。

政府の15兆円に及ぶ第二次補正予算も成立しそうな見通しになりまして、これ  
から、いよいよ衆議院総選挙も秋までにはありますが、いろいろな意味で気ぜわ  
しい日々です。

宇部市の市長選も2人が立候補されるようです。いろいろな会合で言っている  
のですが、マニフェストの内容を十分チェックし、それに対する私たちの意見も  
出した方がよいと思います。

皆様のお手元にこれまでの会議の議事録が行っていると思います。私も一読し  
ましたが、非常に内容が濃いものがあります。特に前回(第5回)の議事録には、  
総合計画の方向性などに対する各委員の考え方が総括されていると思います。

これをじっくり読んでいただき、今日はまた一段と熱の入ったいい討議をお願  
いします。

(事務局) ありがとうございます。では早速議事に入りたいと思います。まず、本日は  
委員の半数以上の御出席をいただいておりますので、本会議は成立していること  
を報告します。会議の議長は、総合計画審議会条例第4条第1項の規定により、  
会長にお願いしたいと思いますので、よろしくをお願いします。

## 3 議事

(会長) それでは、議事に入ります。本日の会議も公開とし、議事録も後日、市のホー  
ムページ上で公開することにしたいと思います。

それでは、まず、議事の1番目に入ります。

分科会のS W O T分析の報告について、各分科会の委員長から、それぞれ要領  
よく簡潔に報告をお願いします。

まず、生活環境分科会からお願いします。

## (1) 分科会のSWOT分析の報告について

(委員) 生活環境分科会の報告をします。資料1にあるように、まちづくりの目標として、「宇部づくり」という言葉が委員の中から出てきました。この言葉は余り目にする事ができないので、この言葉を活かしたいと思いました。

そこで、「市民一人ひとりが宇部づくりの主役として、「人と緑と環境」にやさしいまちを目指す。」を目標としました。人と緑と環境が大きな方向性ということですが。

成長、強化、改善、改革とさまざまな戦略がありますが、この分野の取組の目玉として、優先戦略を赤字で示しています。分科会や全体会議では、この2つの優先戦略に議論が集中しましたので、まず、これについて説明します。

まず、「本市独自のコンパクトシティ化を目指し、効率的な公共交通の活用により、中心部のコンパクトシティと市街地周辺部のサテライト的コンパクトシティに向けた整備を推進する。」という戦略です。

コンパクトシティに関する議論の中で、郊外に住む委員から、自分たちは自分が住む地域から出なくても十分生活しているという意見がありました。

宇部の歴史的な都市の形成過程を考えても、合併の経緯を考えても、市街地だけではなく、東岐波 西岐波 厚南等々の周辺部にも中心があります。

コンパクトシティ化は、中心部に人を集めるという意味の「コンパクト」ではなく、「歩いて利用できる街」という意味の「コンパクト」を目指します。

つまり、中心部をまず整備して、それをモデルとして、東岐波なら東岐波、西岐波なら西岐波、厚南なら厚南、それぞれの地域性に基づいた独自の形で、「歩いて利用できるコンパクトシティ化」を考えていったらどうかという提案です。

次に、「本市で学ぶ多くの学生に目を向けるとともに、若者の市外への流出を抑制する上からも、学生が住みやすい生活環境づくりや魅力とにぎわいのある街なか空間を創出する。また市民と学生との交流の機会を創出していく。」という戦略です。

言うまでもなく、これから少子高齢化が進んでいきます。しかし、宇部市にとってありがたいことに、学生数に教員数を加えた固定化した人数は、定員がよほど減れば別ですが、宇部にとってますますウエイトを高めていく存在です。これを宇部のまちづくりに活かさない手はないというのが基本的な考え方です。

また、「市民と学生の交流の機会」については、今、大学では、学生と地域ボランティアとの関わりを、学生の資質育成の中で重視していると聞いています。

例えば、高齢化に伴うボランティア活動を宇部市内で充実させるために、NPO・市民団体・ボランティア団体と学生の交流を深めることが考えられます。

ところで、聞くところによれば、熊本では、学生に「さん」を付けて、「学生さん」と呼ぶそうです。

最近、誰もが大学生になることから、学生の価値は昔に比べると確かに低くなっています。しかし、宇部における大学の存在の大きさ、宇部になぜ工学部と医

学部があるのかを考えていただきたい。これは宇部の歴史を象徴しています。この存在をもっともっとアピールすべきだと思います。

できれば、学生が市街地に出てきて食事するときには、「学生さん」には割引があるような仕組みが、宇部市民の意識の中に芽生え、定着していけばという思いから、生活環境のまちづくりの目標の中に、学生に関する戦略を加えました。

その他としては、強化のための戦略「高齢化が進む中で、中山間地域や郊外の各地域内での移動や地域間及び中心市街地への移動の手段を確保するため、より利便性・効率性の高い生活交通に見直す。」に触れたいと思います。

いかにして交通手段を確保するかという問題は、どこの市町村においても、特に県内市町においては、重要な課題です。宇部市の場合も、北部、中山間地域を中心として、この問題を軽視するわけにはいかないということです。

ここでは、そういう問題が宇部にあるということを書くにとどめていますが、例えば、ボランティアによるコミュニティバスの運行といった意見も出ましたので、そのようなことにも力をいれていければと思います。

その他の戦略については、教育文化分科会や産業振興分科会の戦略に関連するところがありますので、当分科会の説明からは省かせていただきます。

(会 長) ありがとうございます。それでは、今の説明について、御意見、御質問がありましたら、どうぞ。

私が入手した情報によると、JRに山口地域鉄道部ができるそうです。山陽本線の小野田から四辻までの間と、山口線、宇部線、小野田線は、そこが一括して管理するそうです。

こうなると、ほとんどの設備・施設については、そこが権限を持つこととなりますので、我々にとっては、お願いするところが分かって、やりやすくなると思います。生活環境問題を考える際に頭に入れておいていただきたいと思います。

(委 員) 山口地域鉄道部の話を聞いて思い出したのですが、以前、藤田市長に、「草江駅」を「宇部空港駅」という名前に変えられないかと尋ねたところ、「それは、ものすごくお金がかかるので、だめなんだよ。」というお話でした。

宇部線の運行とも連携しないと難しいのですが、あれだけ空港に近いところに駅がありながら、まったく違う名前であまり活用されていないのはもったいないと思います。

山口地域鉄道部が運用するようになると、飛行機にダイヤを合わせたJR宇部線の運行や、草江駅の宇部空港駅への名前の変更などを、前向きに検討できるようになるのでしょうか。

(会 長) 私も話を聞いたばかりですが、いい組織体になったという印象です。おそらく今からいろいろな施策をやっていくのだと思います。

多分、山陽本線は、もうこれからは設備への投資は余りやらないと思いますし、今度はコンパクトの中に山口線・宇部線が主力が入っていますので、地方の支線

を充実させるためにもいい組織だと思っています。お尋ねの件については、相談に行ってみればと思います。

今後、その辺りを市にも十分調査してもらい、宇部の鉄道が又栄えるように、総合計画の中に施策を織り込んでいけばよいのではないかと思います。

この件について、市に何か情報は入っていますか。

(事務局) いえ。特に聞いておりません。

(委員) 今お話に出たように、ぜひ、学生に目を向けた施策の推進をお願いしたいと思います。

宇部市には工学部に約3,000人、医学部にも、医学科と保健学科に約1,500人、併せて4,500人の学生が在籍しており、大学院も併せると約5,000人の学生が生活していると思います。

彼らに言わせると、宇部には冒険をするところがない、機会があれば行ってみたいというところがないということです。このようなことが、若者の宇部離れの原因になっているように思います。

医学部の学生は、日本国中、世界中で働くことができるので、卒業後は大学から出て行くわけですが、大学に残る率は、「まちの規模×大学の歴史」と昔から言われています。山口大学医学部は65年になり、まちの規模に変わりはないのですが、学生にぜひ、残ってもらいたいと思います。

彼らがここで働けば、家族もここにすることになり、税金も増えることになります。ぜひ、学生が残るようなまちづくりをしていただきたいと思います。

また、「海」をもっと利用することができないだろうかと思います。

私は九州の海辺で育ったのですが、宇部市は海岸に面していながら、海がまったく利用されていないように思われます。もちろん宇部興産の立派な港はあるのですが、市民が楽しめるシーサイドが整備されていないように思われます。

宇部市は人口規模が県内で3番目であるにもかかわらず、宇部港からはフェリーがどこにも出ていません。徳山港や下関港には、フェリー便がたくさんあるにもかかわらずです。

工場の港であって海が活かされていない、シーサイドをもっとビジネスチャンスにできないものかとずっと思っていました。

東岐波に海水浴場のようなところはできましたが、シーサイドで宇部市民が、レストランで食事をしたり、瀬戸内海や船を眺めながら楽しめるような空間がまったくありません。私は素人なのですが、これは商売にならないものか、生活環境の中で海をもっと活かしたらと思います。

外国に行くと、10万人、15万人規模のまちでも、本当に海をきれいにして、土曜日、日曜日には出店などが出て、そこで市民が楽しむといったことが普通です。海に面しているまちはどこでも、そのようにしています。

(会長) ありがとうございます。当審議会では、大学から3人の先生が委員になって

おられますが、学生については、その存在を意識したまとめになっていると思います。それだけでも、先生方が委員になられた成果が出ていると思います。今言われた意見も十分活かして、まとめていきたいと思います。

また、後で教育のところに出てくると思いますが、今、市では、総合政策部長を中心に、高専・工学部とともに、「科学の館」のようなものを検討中です。

それから、「海」の件ですが、西岐波の海岸は、設備としては余り整備されていませんが海水浴に行く人が多く、食事をするところも、空港や海が見える店としては、個人商店ではまああのところはあると思いますが、確かに大掛かりなものはありませんから、今後の課題としていきたいと思います。

ほかに意見はありますか。無いようでしたら、次の報告に移ります。健康福祉分科会から報告をお願いします。

(委員) 健康福祉分科会の報告をします。委員としては、行政のエキスパートである倉重委員、大学の先生である西村委員、医療関係の中野委員、福祉関係の有田で、話を進めてきました。

まず、市民ワークショップにおいて、ノーマライゼーションという考え方によるものだと思いますが、障害者・高齢者・健常者が普通にまちの中にある地域づくり、そのためにふれあいセンターをもっと活用したらという提言がありました。具体的なキーワードとしては、「ふれあいセンターコンビニ化プロジェクト」という非常にとっつきやすい文言が提案されました。

分科会の進め方としては、まずはブレインストーミングで自由な意見を出し、それらを集約するという方法を採用しました。

ほかの分科会も同じだと思いますが、少子高齢化が非常に大きな話題の一つになりましたが、高齢化＝問題社会ととらえるのではなく、高齢化＝知識・経験社会ととらえることで新しい視点が生まれるのではないかという意見も出ました。

宇部市では、退院患者の在宅の受入れの取組を昔からやっけていまして、退院情報連絡システムというものがありますが、これが、昨年度、全国10団体6個人が受賞した第60回保健文化賞を受賞しました。

そして、現在ではこのシステムが障害者関係の連携の中にも活かされています。これは、十分宇部市の強みとして機能するのではないかという議論がありました。

ただ、宇部市では、子供に関するものも含めて、いろいろなことをやっているのですが、なかなか一般市民への浸透が進んでいない、やっている人たちはやっているけれど伝わっていないという現実があり、市民意識の啓発が必要だろうということになりました。

また、教育文化分科会と非常に親和性がある案件がありました。高齢者の人材活用、子育て支援、発達障害等のある子供たちの教育環境、ふれあいセンターの活用、こういう面で接近している部分がありましたので、前回、少ない時間でしたが意見交換を行いました。

こういうことを重ねる中で、まちづくりの目標については、4人の委員から、思い思いのキーワードが出ましたが、最終的には、資料2にあるように「一人ひ

とりが心豊かに安心して暮らせるまちを目指す。」を目標にしました。

なぜこの言葉を選んだのか、実はいろいろな議論がありました。

最初の「一人ひとり」という言葉には、単に全員という形に一括りにするのではなく、画一的なものではなく、多様な人たち、それぞれ個人個人が、という思いが込められています。

次の「心豊かに」という言葉ですが、そのような多様性の尊重の下で、誰もが能動的に自己実現を目指すという思いがこめられています。

次の「安心して」という言葉には、それぞれが自己実現を目指す際に、セーフティネットと申しますか、健康福祉のネットワークで取り巻いて、その自己実現を支援していくことを意味しています。

この目標は、そのような「まち」を目指したいという思いでできています。

このまちづくりの目標の検討の際に、「まち」という言葉に換えて「健康都市」という言葉にできないかという議論がありました。健康都市とはWHOが定義している言葉ですが、健康都市という言葉はまちづくりそのものの考え方であることから、分科会で取り上げるには大きすぎるし、取り上げるとしたら余りにも意味が矮小化してしまうということで、採用しませんでした。

SWOT分析の優先戦略については、資料2の赤字で書いている部分ですが、「地域に根ざした健康福祉の充実」を選びました。

ふれあいセンター等の活用によって、多様な人たちが、それぞれの地域で心豊かに、そのひとらしく活躍して暮らしていける、そのような社会形成を目指したい、そのような宇部市を目指したいということです。

高齢、障害、少子化、過疎化等々、健康福祉に関して、問題点・論点はたくさんありますが、地域がそのすべての根幹であると考えます。それぞれの地域で、そこに住む多様な個性を持つ人たちが、当たり前のように暮らせるようにできたらという思いで、提案します。

(会 長)      ありがとうございました。それでは、今の説明について、御意見、御質問がありましたら、どうぞ。

(委 員)      健康に関しての話ですが、宇部市の医師の数は県下では断トツです。大学病院がありますので、開業医の数だけでなく勤務医も多く、大学院の学生も医師免許を持っています。山口大学医学部には、学生も含めると、医師免許を持つ者が590人在籍しています。

それらすべての医師の数を加えると、人口あたりの医師数では全国でも有数のところですよ。こういうところをもっと利用すれば、福祉はともかく、健康については、もっといろいろなことができる潜在力は持っていると思います。

開業医の数も人口あたりの数からすると多いのです。小児科、産婦人科のように個別の話になると、いろいろな凸凹が出てきますが、お産ができる場所も、宇部市にはまだまだ十分あります。

防府市ではお産ができる医院が一軒もなく、県立病院だけになりました。そう

いう状況の中で、宇部市では開業医もしっかりお産をやってくれるし、大学病院も控えています。

このように、宇部・小野田地域は非常に医師が多いところです。健康については、市と医学部附属病院とが組めば、まだ、いろいろな催しや計画ができるのではないかと思います。今まで、市から大学病院への申し入れが何もありません。

市は休日・夜間救急診療所を持っており、夜11時まで診療していますが、これも市長にお願いしまして、2年前にやっと1時間ほど延ばしていただきました。それまで、大学病院には1万人を超す急患が来ていましたが、その8割が宇部市の患者でしたので、そちらで診てもらい、今7,500人まで減りました。

宇部市がお金を出している医療行政はそこだけです。市民病院もありません。休日・夜間救急診療所は、年間約1億2千万円の費用で運営していると思いますが、確かそれ以上の売上げがあったと思いますので、損にはなっていないと思います。

せっかくこれだけの医師がいるわけですから、健康に関して住みやすい宇部市をつくるのであれば、宇部市にも、もう少しがんばってもらって、やることあるのではないかと思います。

(委員) おっしゃられたように、宇部市は医療の関係が充実しているし、いろいろなネットワークもあります。ただ、市民に伝わっていないというところもあるようですので、これだけの資産があることを市民にもっとうまく伝えたらどうかということです。

宇部市にはアクティブライフ宇部のような健康づくりの計画もありますが、果たしてこれもどれだけの人が知っているかというところがあります。いいところをもっともっと積極的にアピールして、宇部の強みにしていけばいいのではないかという話もありました。

(会長) 「一人ひとりが安心して」ということに関して、今言われたことは本当に重要なことだと思います。

以前言ったように、宇部市の市民は恵まれ過ぎて、優位性を余り感じていないと思います。それはそれでいいことなのですが、その強みを今後どのようにPRしていくかです。宇部のまちはすばらしいところで、安心して住めるところだということを新総合計画で打ち出していけば、一つのPRになると思います。

前回、障害者の雇用率は山口県が全国一という話が出ました。当然、宇部市もその中で一番なのだと思いますが、ぜひそのようなことも表に出して、それを伸ばしていくのが目玉だろうと思います。

人口あたりの医師数や障害者の雇用率における優位性を目玉として、それを更に充実させる方法を考えれば、ますます安心して暮らせるまちになるように思います。

それでは、次に移りたいと思います。教育文化分科会の報告をお願いします。



(委員) 我々が事務局と一緒に作ったまちづくりの目標は、資料3にあるように「豊かな自然と文化の中で、みんなが心をつなぎ笑顔で暮らせるまちを目指す。」です。

当分科会の委員は、私以外は皆女性で、いわゆるお母さんです。分科会の中ではいろいろな意見が出ましたが、それはこの分析表にも書いております。そんな中で、特にたくさん意見が出た論点が二つありました。

まず、現在の社会情勢が関係しているのではないかと思います。子供の教育の在り方が、10年、20年前と比べ、だんだん変わってきて、心配なところが多くあるということです。

次に、これから高齢者がますます増えていかれると思いますが、高齢者は人生経験が長く、いろいろな知識が豊富ですので、その知識を子供たちに分けていただけるシステムができればというものです。

会長からは、目玉を一つ二つと言われていましたが、当分科会では、少々まとめきれないところもあるのですが、三つのくくりでまとめています。

一つ目は、「彫刻のまちづくり」です。

宇部市がこれまで進めてきた彫刻のまちづくりの歩みを、教育や学習の教材としてもっと活用して、宇部の誇りと文化を継承するというものです。

二つ目は、「高齢者の社会参加」です。

この社会参加の中には、もちろん子供たちの教育も含まれています。高齢者の社会参加により、社会・学校教育の取組を充実し、子供たちの情緒の安定や社会適応能力の向上を図るとともに、きめ細かく質の高い教育を推進し、歴史や文化を継承するというものです。

三つ目は、「産学官の連携」です。

児童生徒の理科離れが進む傾向にある中、理科系の高等教育機関や、研究機関が多数立地するという宇部市の特長を学校教育に活かし、理数系に強い児童生徒を育成するというものです。

これらについて、皆様の意見をいただけたらと思います。

(会長) ありがとうございます。それでは、今の説明について、御意見、御質問がありましたら、どうぞ。

資料3の中に、成長のための戦略として、「多面的な物の見方や考え方ができる児童生徒を育成するため、理科系の高等教育機関と連携し、特色ある教育の取組を進める。」というものがあります。

先ほど言いましたが、「科学の館」のようなものを作って、高専・工学部の学生にいろいろと工夫してもらい、子供たちに科学への興味を持たせるという取組を進めています。今、総合政策部長がとりまとめをされていると思います。途中経過でも差し支えありませんので、説明をお願いします。

(事務局) この間、高専に行って話をしました。

高専でも各小中学校へ出かけて教えておられるし、青少年会館では発明クラブも行われています。山大でも同様な取組をやられていると思います。それらを一

回全部洗い出してみようと、今、データを集めています。

その上で、常盤公園等のように人がよく集まる場所で、「科学の館」のような発想で、各所が連携して、ひとつにまとめて何かできないか今後検討したいと考えています。

(会長) ありがとうございます。ぜひ環境を活かして、いい方向にまとめてもらいたいと思います。

(委員) 今の理科系の教育の話に関してですが、うちの小学校の前任の教頭先生が今、博物館に長期研修に行かれています。そこで、学校に博物館の物を持ってこられ、実際に見る機会を設けていただき、子供たちが目を輝かせています。

博物館に行ってガラス張りの所で見るところを、じかに見たり触ったりできるのは子供たちにはとてもいい経験になると思います。ちょうど今週、参観もさせていただきましたが、とてもいい取組だと思っています。

校区のコミュニティ組織については、宇部市には校区ごとにふれあいセンターがあり充実していると聞いています。

特に小学校はコミュニティ組織とのかかわりがあるのですが、中学校とも連携を取っていこうという話が校区でも出ています。強化のための戦略の「各校区のコミュニティ組織と小中学校とが地域連携を図り、将来にわたって継続することができる取組を推進する」という戦略には力を入れていただきたいと思います。

(委員) 成長のための戦略「多面的な物の見方や考え方ができる児童生徒を育成するため、理科系の高等教育機関と連携し、特色ある教育の取組を進める。」について、意見というよりは質問です。

「理科系の高等教育機関と連携」することで、「多面的な物の見方や考え方を身に着けるといのは、どういう意味でしょうか。私も理系の人間で機械屋なのですが、技術系の人間は多面的な発想は苦手としているように思いますので、「理科系」と「多面的な物の見方や考え方がうまくつながらないのですが。

(委員) いろいろなことが考えられる子供を育成するためのひとつの手段として、宇部市には様々な理科系の教育機関があるので、それも利用しようということです。

(委員) 今の話と関連して、先ほど総合政策部長の話の中に宇部高専の話も出ていましたので、工学部の取組も紹介しながら、少しお話したいと思います。

現在、「理科離れ」が進んでいると言われていますが、これは正確ではなくて、正しくは「工学離れ」です。医学部は受験生がむしろ増えていますし、理学部がほとんど横ばいで、工学部がものすごく減っているのです。

それはなぜかということ、医学部ということ、お医者さんになるということが、中学生・高校生にも非常に分かりやすいわけです。同じように、教育学部も増えています。学校の先生になるというのは非常に分かりやすいですね。

ところが、工学部は、以前であれば、機械工学科であれば自動車であるとか、電気工学科であれば回路など、分かりやすかったのですが、今は何をやっているのか分からない状況で、ここでいう「多面的な」ことをやっています。工学部といっても、ものづくりからかなりかけ離れていることもあって、イメージできないというのが、工学離れが進んでいる一つの理由になっています。

それとも関連するのですが、中学校、高校の先生で工学部のことが分かる人がほとんどおられません。工業高校は別として、工学部出身の先生がまずおられません。そのため、工学部に進学する学生は、数も少なくなっていますが、何をしようかという目的自体もぼけているという状況です。

私が工学部に入った頃は何を作りたいということが非常にはっきりしていたのですが、最近はそのようなことはなくて、高校の先生も「とりあえず工学部へ行っておけ」という状況のようです。

ただ、女子学生は少し違ってきます。今、工学部に女子学生が1割強くらい、約300人在籍していますが、女子学生は目的がはっきりしています。自分はこういうことをやりたいと、学部長室へ提案にくるのはみんな女子学生です。

よくよく考えれば、工学部は今でも男の世界と思われています。その中でやっていくためには、それなりの目的をちゃんと持ってきている女子学生がほとんどです。男子学生は、とりあえず工学部というようなところがあるので、女子学生の方が、成績が優秀で考え方もしっかりしています。男子学生が全部だめというわけではないのですが。

このように、全国的に工学離れが進んでいるので、全国工学部長会議でも、これは大変な問題だということで取組を始めました。1年前からワーキンググループを作り、工学離れをどうしたらよいかと、いろいろな調査・活動を始めています。

まず、全国で53の国立大学に工学系の学部があるのですが、その中でどこがどのような取組をしているかを調べました。そうすると、涙ぐましいまでに、幼稚園、小学生、中学生、高校生、社会一般、いろいろな人に対して、工学部を知ってもらうために、いろいろなイベントをやっていることが分かりました。

例えば、宇部では、「夏休みジュニア科学教室」、これは工学部だけでなく、県内の大学、高専や、宇部興産、セントラル硝子を始め企業も一緒になって、小学生・中学生に夏休みに体験学習をさせる取組ですが、15年以上も続いています。

また、昨年度から、工学部が中心になって「長州科楽維新プロジェクト」という取組をしています。昨年度は、活動の一つとして、クリスマスシーズンに、常盤公園でLED（発光ダイオード）を使ってイルミネーションを作りました。

今後やらなくてはいけないと思っているのが、学校の先生との交流です。

このたび、小学校、中学校、高校の教員免許には更新が必要になりましたが、その更新の講習にぜひ工学部に来ていただこうと考えています。工学部でもいろいろなカリキュラムを提供して、理科系、工学部というものがどういうものなのかを分かってもらおうと、今準備をしています。

市の教育委員会でも、宇部市の小学校、中学校、高校の先生に、免許更新の際

には工学部で講習を受けるようにと行っていただけると、現在の科学技術が学校の先生にも分かっていただけたと思いますので、協力をお願いします。

このように、いろいろな取組をしていますが、まだまだ一般の市民を始め、小学生、中学生、高校生に十分分かっていただけていない状況です。教員、職員ではマンパワーが限られていますので、今後は学生の力も借りながら、いろいろとやっていこうと考えています。

先ほど、総合政策部長のお話では、現在どういう取組が行われているかを整理され、今後の活動を検討しているというお話でした。私たちもいろいろなデータを持っていますので、それを提供して、一緒にやっていけると思っています。

(会 長) 大変貴重な意見をいただき、ありがとうございました。

これは少し語弊のある話かもしれませんが、ある女性の校長先生から聞いたところでは、先生には理科系が嫌いだから教育学部に行ったという人が多いようです。当然教えるのも苦手で、生徒から尋ねられるのも避けているということです。

そういう先生が、生徒に対して、ぜひ物理・化学方面に進学するようには、まず言わないと思いますので、今の話は、非常に大切なことだと思います。

宇部市としても、工学部・高専が衰えないためにも、小学生から始めて、いろいろな施策を打っておく必要があると思います。その辺りを計画の中に織り込んでもらいたいと思います。

それでは、次に移りたいと思います。産業振興分科会の報告をお願いします。

(委 員) 産業振興分科会では、昨年の12月以来、4回の会議を重ねました。分科会の議論の経緯を少し説明しますと、内部環境や外部環境の検討から始まっていると議論したのですが、その議論の中心が2つあったと思います。

一つ目は、事業の選択と集中です。

市の財政状況については、以前説明がありましたし、現在の経済の環境・状況を見ても、近年すぐ好転する状況にはありません。そこで、事業を進めるに当たっては、あれもこれもではなく事業の選択と集中の必要があり、薄っぺらなものをやっても仕方ないというものです。

二つ目は、第一次・第二次・第三次産業の連携です。

産業分野には第一次・第二次・第三次産業があるわけですが、それぞれの分野ごとに個々に取り組んでもいい結果は出ないので、素材・生産・販売を連携させることで、雇用の確保を図り、交流人口の増加につなげたいというものです。

個々の意見については、資料4の中にありますので省略します。

それで、会長から目玉を一つ、二つと言われていましたが、当分科会では、三つ優先戦略を掲げています。資料4の赤字の箇所です。

一番目は「第一次産業の素材を生かし、第二次産業の加工・技術を活用し、第三次産業の販売・PRを連携させ、行政支援による推進体制を整備し、新たなブランド化・ビジネス化を図るとともに、雇用の場を確保する。」という戦略です。

二番目は「宇部市の歴史や彫刻、産業観光の取組など今ある地域資源を活かし、

情報発信することにより、都市イメージのブランド化を図り、交流人口を増やす。」という戦略です。

三番目は「産学官連携による新規産業の創出や環境のビジネス化により、地域産業の活性化を図る。」という戦略です。

これらの戦略を、具体的な事業として、実行計画に盛り込んでいただき、「農水商工が連携した地域ブランドの創出により、人も宇部もいきいきとした、にぎわいと魅力あふれるまちを目指す。」という産業振興分野のまちづくりの目標を達成したいと思います。

(会長) ありがとうございます。それでは、今の説明について、御意見、御質問がありましたら、どうぞ。

(委員) 宇部市には、工学部、医学部、フロンティア大学があるにもかかわらず、コンベンションについて、この戦略の中では一言も触れられていません。産学官の「学」の利用を書いていないのは、市はその程度にしか認識していないのかと残念に思います。

昨年、16,000人が参加する日本循環器学会を開催しました。この規模になると広島でも無理なので、かろうじて福岡で4日間、ぎちぎちで開催しました。この7月に2,500人が集まる学会があるのですが、これも、小倉、門司、下関のホテルを借りて、下関の海峡メッセで開催します。

医学部には40人くらい教授がおりますが、毎月のように誰かが学会をやっています。ほとんど宇部でやれずに、外にもっていかざるを得ない状況です。会場の設備に加え、ホテルはほとんど個室が必要なので、ホテルがいくら無理をしても800人も泊まれないからです。

私としては、何とか宇部にお金を落としたいと思っています。昨年の福岡での学会では、4日間で25億円のお金が落ちたそうです。福岡市長から、学会への補助金を500万円いただいたくらいです。ぜひ山口県でやりたかったのですが、どうあがいてもできませんでした。

今度の2,500人の会議も何とか宇部でやりたいと思い、コンベンションの会社に、どうにかならないかと検討してもらったのですが、宇部では大分不興を買うのでやらないほうがよいと言われ、仕方なく下関へ持っていきました。

大変言いにくいことですが、医学部、工学部、フロンティア大学に一言も触れず、コンベンションでは何をされようとしているのでしょうか。

ここは、空港も近いですし、新幹線からもタクシーで30分です。医学部、工学部がある限りは、皆さん学会を順番にやりますので、ここで学会ができるような環境整備を考えていただけると、収入源になると思いますが、いかかでしょうか。

(委員) ありがとうございます。コンベンションももう少し頑張れという御指摘だったと思います。

確かに、ホテルについては、宇部では700～800人でも少し多めぐらいの数字で、

ビジネスホテルのまあまあのシングルクラスで、小郡、小野田を含めても、多くて1,000人ぐらいだと思います。市でもホテル誘致の話などあるようですが、まだ実現していません。

学会を誘致すれば、宿泊料や飲食等を含め、大変な経済効果があるのは我々も十分分かっています。観光コンベンション協会としても、医学部・工学部と一緒に学会誘致研究促進委員会も立ち上げ、来月も会合を行いたいと思っておりますが、先生方からいつも言われるのは、収容能力と会場の利用制約の問題です。

(委員) たぶん、工学部も医学部も、教官は、自分たちの大学がある地元の宇部市で会議をやりたいのです。我々にはその思いがものすごく強いのです。私も個人的には努力したのですが、できません。会場も大変ですし、宿泊のこともあります。

教官の皆さんも最近はおきらめたところがあって、中途半端なら下関で、大きな会議であれば広島でやる、ということになっています。

私は本当にもったいないと思います。工学部、医学部、フロンティア大学を併せると、小さな500人規模から、大きいのは2,000~3,000人規模まで、年間何十回やっているか分からないほど学会をやっています。

我々はぜひやりたいのです。そこを理解していただき、誘致しやすい環境づくりをしていただければと思います。その辺りが戦略に全く出てこないのは、全く考えていないということなので、寂しいと思います。

(委員) 成長のための戦略の中で、コンベンションの推進に触れてはいるのですが、事務局とも協議して、学会等のコンベンション誘致についても戦略に盛り込みたいと思います。

(会長) 事務局から何か補足はありますか。

(事務局) 非常に貴重な意見でしたので、観光コンベンション協会と関係各部が集まって協議をさせていただきます。

収容能力というのが大きな問題で、だからといって、すぐにホテルを建てるわけにもいきません。実際に、どのくらいの規模のコンベンションであれば対応できるのかを、外に対してPRをしていかないといけないと思いました。そのためには、どのくらいの規模であればできるか詳細に調べ、そのようなきちんとしたデータがないとPRできないと思いました。検討させていただきます。

(会長) 今言われたことは本当に貴重な意見なので、観光コンベンション協会も、商工会議所も、人に来てもらって地元にお金が落ちれば活性化していきますので、このような数少ないチャンスを逃さないように、市・観光コンベンション協会・商工会議所と一緒に考えていく必要があると痛感しました。

それでは、分科会の報告はこれで終わりたいと思います。次に議事の2番目「基本構想原案の検討について」、事務局から説明をお願いします。

## (2) 基本構想原案の検討について

(事務局) それでは、資料5に基づき、説明します。

これは、当審議会から答申いただく「基本構想案」について、その検討のたたき台として、原案をお示しするものです。

まず、全体の構成につきましては、目次を御覧ください。

答申は2部構成とすることとし、まず第1部は「基本構想案をまとめるに当たって」と題して、新総合計画の策定に向け、審議会における検討の経過や構想の実現に向けた審議会の思いをまとめています。

次に、第2部は「基本構想案」を8章立てでまとめています。

第1章から第3章では、時代背景や社会環境の変化、地域特性を整理するとともに、基礎調査結果や分科会でのSWOT分析に基づき、まちづくりの課題を整理します。

第4章から第7章では「今後のまちづくりに向けたコンセプト」「まちづくりの基本理念」「求める都市像」を掲げるとともに、具体的なまちづくりのための戦略を整理します。

それでは、本日提案する、第1部と、第2部のうち第4章から第6章までの、総論部分について説明します。

第1部「基本構想案をまとめるに当たって」では、まず2頁の「基本的な考え方」で、審議会での審議の方向性を記述しています。

次に「策定に当たって」では、基本構想を策定するに当たって、「まちづくりへの新たな取組」と「取組の選択集中化」という視点を重視して、また、市民との協働を基本として審議・検討を行ったことを記述しています。

最後に3頁の「今後の取組について」では、第四次総合計画をまちづくりの指針として市民と共有するための情報提供と説明責任を、また、重要度や優先度を慎重に検討した上で、工夫を凝らしながら、市民満足度向上のため、各施策に取り組むことを、審議会の総意として求めるという形にまとめています。

それでは案を朗読します。

(朗読)

次に、第2部の「基本構想案」のうち、16頁の第4章「今後のまちづくりに向けたコンセプト」は、これまでの基本構想にはなかった新たな試みとして、まちづくりを進めていく上での基本的な概念を記述しようとするものです。

まちづくりの主役は「市民」であるということを改めて再確認し、市民一人ひとりの取組を地域に、そしてまち全体に広げていくため、その合言葉を「元気」としました。ひとが元気になり、地域が元気になることにより、まちが元気にな

り、誰もが住みたい、住みたいと思えるまちを目指すというものです。

合言葉については、以前、まちづくりのキーワードについて皆様の意見を提出いただいた際に、併せて提案いただきました。その提案いただいた言葉と事務局が示した例示の中から、月並みな言葉ではありますが、「元気」という言葉を選びました。

今、社会経済情勢は右肩下がりで行き不透明という状況の中、まち全体が疲弊しているような時代にあっては、「元気」が最も必要ではないかと思われまます。そこで、「元気」を合言葉に、市民・民間・行政など様々な主体が協働しながら、一体的にまちづくりを進めていくことが大切であると考え、提案するものです。それでは案を朗読します。

(朗読)

続いて、17頁の第5章「まちづくりの基本理念」です。本市では、第一次総合計画の時から、今日の宇部市を築き上げる理念であった「共存同栄・協同一致」の精神(こころ)と、市民宣言に基づく「人間が尊重される都市づくり」を、まちづくりの基本理念として掲げてきました。この基本理念を、宇部市民の永遠の請願として、新総合計画においても堅持し、継承しようとするものです。

それでは案を朗読します。

(朗読)

最後に、18頁の第6章「求める都市像」です。これは、第5章で掲げた「まちづくりの基本理念」を根本としながら、第4章で「まちづくりのコンセプト」とした「元気」のあるまちを目指し、市民や地域が行政と協働して取り組むことを目標とするため、「みんなで築く 活力と交流による元気創造都市 ～地域資源を共有し、みんなの元気を発信する協働のまちをめざして～」を求める都市像とすることを提案するものです。

また、この元気創造都市の実現に向けて取り組むため、「環境」「安心」「健康」「地域ブランド」「市民力」の5つを戦略のキーワードとすることも提案しています。

なお、県内他市が、現行の総合計画で、この求める都市像に相当する目標をどのように定めているかについて、別紙参考資料に整理していますので、そちらも参照していただけたらと思います。

19頁から20頁にかけては、各分科会で議論いただいた分野ごとの目標や優先戦略を中心に、分野別目標としてまとめました。

20頁の最後には、5本目の柱として、行政経営分野の目標を掲げています。これは、行政側の目標として、事務局がまとめたものです。

それでは案を朗読します。



( 朗 読 )

説明は以上です。

( 会 長 )     ありがとうございます。この内容については、それぞれいろいろな意見があるでしょうから、ここで議論を始めるとかなり長時間になると思います。まず、これだけでは、言っておきたいという意見がありましたら、お願いします。

( 委 員 )     何点もあるのですが、2点に絞らせていただきます。

まず、18頁の「元気創造都市」ですが、「創造」という言葉が入ると、今現在、元気がないように思われますので、「元気都市」のほうがよいと思います。

次に、同じ頁に「環境」「安心」「健康」「地域ブランド」「市民力」5つのキーワードが挙げられていますが、その位置付け・順番はこれでいいのか、自分としては、「市民力」と「地域ブランド」は順番を換えたほうがよいと思います。

そうすると、「環境」は「地域ブランド」であり市民の「安心」につながる、「安心」は「環境」と「健康」から創られ、「健康」は「市民力」で創り「安心」につながる、「市民力」は「健康」と「地域ブランド」から創られ、「地域ブランド」は「環境」と「市民力」ということになります。

今のままですと、「地域ブランド」は「健康」と「市民力」ということになり、健康都市というイメージにはなるのですが。

( 会 長 )     ここでは、とりあえず意見として聞いておく形のほうがよいと思いますが、事務局から何かありますか。

( 事 務 局 )     今の意見にお答えするという意味ではないのですが、今日の提案は、あくまでもたたき台として提案したものと理解していただきたいと思います。この中身をどう変えるかについては、審議会の委員の皆様の議論の中で作り上げていただければと考えています。この案どおりで認めていただくというスタンスで提案はしていませんので、誤解のないようにお願いします

都市像にしても、ぱったり変えていただいて差し支えありません。皆様がこのような目標がよいという議論の中で決めていただければと思います。

キーワードについても、順番を入れ替えることも差し支えないと考えています。たたき台の中では、それぞれ独立したキーワードと考えており、横のつながりまでは想定していませんでした。キーワード自体を変えることも差し支えありませんし、キーワード相互の関連性も踏まえた上で、横のつながりも十分議論していただければと思います。

キーワードについて補足します。今日はまだお示ししていませんが、第7章「まちづくりのために」で、具体的な戦略を整理したいと考えています。その際の切り口として、5つのキーワードと、分科会で検討した各分野の戦略(19、20頁)の2つがあると考えています。

例えば、「環境」というキーワードに対して、各分野でどのような取組が戦略として考えられるかというように、2つの切り口を掛け合わせてマトリクス的に整理したら分かりやすいのではないかと、まとめ方を考えているところです。

(委員) 1点だけ指摘します。20頁の教育文化分野の目標の中に、「理科系の高等教育機関」とあります。工学部の人間としては、このように書いていただいていたのですが、宇部市内には、フロンティア大学、宇部短大、そして、理科系にしても、医学部、工学部、宇部高専と多様です。いろいろな高等教育機関があることは宇部にとって素晴らしいことだと思います。ここは、「理科系」と限る必要はなくて、むしろ「多様な」という考え方のほうがよいと思います。

(委員) 20頁の産業振興分野の目標で、先ほどの御指摘もありましたので、「都市イメージのブランド化」の後に、「コンベンション誘致」という文言を追加してもらいたいと思います。

(委員) 重箱の隅をつつくようで、申し訳ないのですが、2頁以降、元号と西暦が併記されているところと、元号だけの表記のところが混在していますので、表記を統一されたほうがよいと思います。

それから、2頁に「転換期・分岐点に適切に対応し」とありますが、転換期と分岐点の違いが分かりません。「転換期」だけでよいのではないのでしょうか。

次に、3頁に「市民その他の多様な主体」とありますが、「その他」というと、非常に粗雑に扱われる言葉になりますので、「市民をはじめ多様な主体」としたほうがよいと思います。

それから、これは私の勝手なこだわりなのですが、17頁に「まちづくりの基本理念」として挙げられている、「今日の宇部市を築き上げる理念であった「共存同栄・協同一致」の精神と「人間が尊重される都市づくり」の市民宣言を宇部のこころとして尊重する。」について幾つか指摘したいと思います。

まず、「協同一致」の「協」の字は、これでいいか調べていただけませんか。当時は「共」の字も使っていました。昔の人は非常に自由に漢字を使っていて、「協力する」の「協同」か、「共に」の「共同」か、私も迷っているところです。たぶんこれでいいと思うのですが、調べていただけますか。

それから、昔は、「宇部のこころ」というのは、「宇部の精神」と書いて「うべのこころ」と読むと教えられました。昔の文章では「今日の宇部市を築き上げる理念であった「共存同栄・協同一致」と「人間が尊重される都市づくり」の市民宣言を宇部の精神(こころ)として尊重する。」という書き方をしていたように思います。そこまでこだわるかどうかは、お任せしたいとは思いますが。

そして、一番気になるのが、「共存同栄・協同一致」です。この言葉は絶対に残しておいていただきたいのですが、この意味の解釈が変わってきているように思いますので、歴史的な解釈の説明をどこかに入れる必要があると思います。

私の理解では、「共存同栄・協同一致」とは、スペイン風邪が流行した91年前

の1918年の米騒動、ここを出発点として、労働者の反乱に資本家たちがびっくりして、労働者階級も市民もみんな一緒だと掲げたものです。

それを踏まえて、区別・差別のないまちをつくる「精神都市」という言葉もあったと思いますが、これが「人間が尊重される都市づくり」のベースになっていると思います。

このような解釈を歴史的に統一して、別に記述していただきたいと思います。

(会 長) ありがとうございます。ぜひ、事務局は、今の指摘を踏まえて原案を修正してもらいたいと思います。

では、次の「目標人口設定の検討について」も基本構想原案に関係しますので、事務局から説明してもらい、また議論したいと思います。

(委 員) その前に確認です。ほかにも意見があるのですが、それは別途提出することになりますか。

(会 長) 今日ここですべてを議論する時間がないので、メールなど、方法は問いませんので、皆様の意見を事務局まで連絡していただいて、それをまとめていくことにしたいと思います。

(委 員) 分かりました。

### (3) 目標人口設定の検討について

(事 務 局) それでは、議事の3番目「目標人口設定の検討について」説明します。

これは、基本構想案でいうと第8章に相当する部分ですが、現段階の案として、別途、資料6として示しています。

以前、基礎調査報告で示したように、国立社会保障・人口問題研究所によって、平成32年が162,405人、平成37年が154,960人という本市の将来人口の推計値が公表されています。この推計を元に、今回の基本構想の目標年次である平成33年の将来人口等を独自に推計しました。

人口については、約161,000人に減少する見込みです。

世帯数については、約72,000世帯で、核家族化も進行していきます。

就業人口については、第一次産業が約1,500人、第二次産業が約16,000人、第三次産業が約52,000人になる見込みです。

これらは、あくまで推計値ですので、この基本構想を策定するに当たり、目標となる人口等の指標をどのように設定するかを議論いただきたいと考えます。

考え方としては、例えば、人口については、実際には、今から12年後の平成33年には推計値よりも更に人口が下回るおそれもあることから、この推計値の161,000

人を下回らないように努力するという趣旨で、推計値そのものを目標値にするという考え方もあります。

また、推計値より更に高い目標値を定めるという考え方もあると思います。

ただし、推計値より高い目標値を定める場合には、目標値を設定するために161,000人に人口を積み上げた根拠を、例えば、どのような取組により何千人の人口増が見込まれる、などの形で別途示す必要があると考えます。以上です。

(会 長) 総合計画なので、人の数は大切な数字だろうと思いますが、人口を幾らにするかというのはなかなか難しい問題です。意見のある人はどうぞ。

(委 員) 国立社会保障・人口問題研究所の推計といえば、一番権威のある推計なので、これを覆す論拠も根拠も何もないのですが、ただ、合併という動きがありますので、従来の人口推計の意味合いが変わってきているように思います。

宇部市の最初の総合計画では「20万都市構想」を掲げ、非常に人口にこだわったのですが、それは合併が前提にならない時代の話でした。

この間、隣のまちの市長さんにお会いした時に、「宇部と山口が合併すると面白いですね。近い話ですよ。」と言っておられました。

宇部市における人口の推移にどれだけの意味があるかということです。今まで、将来人口の見通しは非常に大きなウエイトを占めて、それに基づくまちづくりは絶対条件でしたが、今の世の中、財政難の中、道州制・地方分権の流れを考えれば、良い悪いは別にして合併推進の議論も具体化してくるということになれば、相対的に将来人口の見方が変わってくると思います。

(会 長) どこかの都市と合併するというようなことは、いろいろ物議を醸しますし、波紋も大きいので、計画ではあまり触れない方がいいと思います。財政再建の問題もありますので、12年後までを考えると、当然そのような動きもあって、何も無いということはないと思いますが、ここであえてそれに触れるというのは、どうかと思います。

私は17万人くらいで設定し、そのために総合計画の中で人口を増やすことを一生懸命考えてもいいのではないかと思います。なかなか分かりにくいと思いますが、皆様もいろいろと意見があると思いますので、根拠と大体の数値があれば、事務局に意見を出していただきたいと思います。

事務局、今日結論を出す必要はありますか。

(事 務 局) できれば、今日結論を出していただきたいと思ってはいたのですが。

というのも、総合計画もそうなのですが、各分野の将来計画もちょうど見直しの時期に来ています。総合計画は市の最上位計画になるので、下水道の整備計画や都市計画などにおいて、都市施設をどのように整備していくのかについては、総合計画に掲げる目標人口の影響が大きいのです。

例えば、先ほど言われた17万人を目標に設定すると、ほかの計画も17万人を目

標において、それに合ったインフラ整備を行うということになりますので、今の財政状況ではなかなか厳しいところが出てきます。目標人口の設定に当たっては、その辺りも踏まえて検討していただければと思います。

今日、必ず結論を出してほしいとまでは言いません。来月の審議会で、今日の意見を踏まえて基本構想の全体について議論をしていただく予定にしていますので、その時点で目標人口について、最終的に詰めていただければと思います。

(会 長) ということなので、すぐには意見も出にくいと思いますし、もう時間も余りありませんので、結論は次回に持ち越すこととして、全体にわたり、何か意見がありましたらお願いします。

(委 員) 今の人口推計の件ですが、国立社会保障・人口問題研究所の推計なので全国的なものだとは思いますが、今どういう形で人口が減りつつあるのかという現状分析の数字をある程度出していただかないと、ただ推測でものを言ってほしいというのと同じことになります。

例えば、出産適齢期の女性が宇部には少ないとか、そのような環境の中で、変えられる部分と変えられない部分を明らかにしてほしいと思います。それが無いと何も議論ができないと思います。材料があったら出していただけませんか。

(委 員) 同感です。国立社会保障・人口問題研究所の推計値には、前提条件が必ずあるはずですが、どのような前提条件の下にこの数字が出されているのか、調べればすぐ分かると思います。その前提条件を列挙すれば、その中で変わりうるものが明らかになります。

例えば、合併とか、ベンチャーが宇部で生まれるとか、工学部が頑張っで地元就職する運動をするとか、そのようなことによって地元の就業者が増えるというように、変化する要因が見えてくると思います。

変動する要因を明らかにした上で、どの程度の変動が考えられるかを考え、この前提であればこの人口が考えられるとか、この変動があった場合には推計を変えなければいけないとか、そういうものが見えてくると思います。そういう整理をする必要があると思います。

(事 務 局) もっともな御指摘だと思います。できるだけ早く、国立社会保障・人口問題研究所の推計に当たっての要素や前提条件を整理して、まとめ次第、各委員に郵送しますで、それを参考にさせていただきたいと思います。

(委 員) 今まで配られた資料を見ると、いずれも「厳しい財政状況」という言葉が出てきます。人口推計においても、生産年齢人口がだんだん減っています。市財政についても、単純に考えると赤字が増えてくるのではないかと思います。

にもかかわらず、将来の都市像にしても、キーワードにしても、危機感が全然感じられません。市広報で基本構想が一般家庭に配られて、「元気創造都市」「環

境」「安心」「健康」「地域ブランド」「市民力」と書いてあるのを読んでも、自分たちは今までどおりでいいのだろうかと思われると思います。

本当に財政が厳しいのであれば、もう少し厳しいことを前面に出すような言葉を選んでほしいと思います。

2頁の「基本的な考え方」には、「自治体の自立と責任が強く求められています。」という言葉が出てきますが、市民一人ひとりが、本当に責任を感じるような、自分たちで築く宇部という意識を持てるような言葉をどこかに盛り込んでもらいたいと思います。

(会 長) 今言われたことはもっともです。

財政問題については、以前資料も配ってもらい、委員の皆様にも財政状況が厳しいという認識は持っていただいたと思います。

総合計画審議会とは別に、宇部市行財政改革懇話会でそのことについて議論をしており、宇部市の財政が今後大変だということについて結論を出すと思います。

総合計画との関係も大いにあるのですが、ここでその議論を始めると、金がないのに構想を言っても仕方ないではないかということになり、苦しいところです。

財政問題については、市民に発信していかなければならないとは思いますが、基本構想の中にこれ以上のことは盛り込みにくいと思います。

事務局に意見はありますか。

(事 務 局) 委員の皆様にも、一市民としてそのような意識を持っていただいたということは、この審議会で説明した意義があったと考えます。

基本構想原案の中でも、ところどころ出てきますが、「選択と集中」の観点から効率的に施策を進めていきたいという辺りに、事務局としては、その意識を盛り込んだつもりだったのですが、表現が足りないということであれば、この中に加えていく方向で考えて差し支えないと思います。

### (3) その他

(会 長) それでは「その他」について、事務局から何かお知らせがありますか。

(事 務 局) すでに、委員の皆様には通知済みですが、次回の審議会は、6月18日(木)の13時30分からこの会場で開催する予定にしていますので、出席をお願いします。

それから、先ほど会長からも話がありましたように、本日、審議いただいた基本構想原案、目標人口の設定等について、ほかにお気付きの点がありましたら、6月8日(月)までを目途に、メモ的なもので結構ですので、メール、ファックス、郵送等により事務局までお送りください。

(会 長) それでは、今、事務局から説明がありました。何か意見や気付きがありましたら、事務局までお寄せください。

本日はいい議論ができたように思いますが、いつも思うのは、総合計画の前にもう少し現状の問題点を審議する場が必要ではないかということです。

本日のコンベンションの話も切実で現実的な問題ですし、そのほかにもいろいろなことがあると思います。

計画も大切ですが、このようなメンバーで、現実の問題を具体的に話し合う機会をぜひ市にも設けていただきたいと思います。現実の問題をさておいて新計画というの、なかなか難しいのをつくづく感じます。個人的には、ここでも現実的な問題をもっと議論したいのですが、総合計画ですので、そういうわけにもいきません。

市民を代表されている皆様の意見はすごく貴重だと思います。市がこういう会合をどんどんやっていただければ、現実の活性化が進んでいくと、会議のたびに思います。会合を重ねると、お互いが分かってきて話もしやすくなるし、人の意見も聞いて、市の現状が分かってくると思います。市にもぜひ検討してもらいたいと思います。

委員の皆様からほかに何かありますか。特になければ、本日の会議は、以上をもって終了としたいと思います。お疲れさまでした。

(事務局) ありがとうございます。それでは、以上を持ちまして、第6回審議会を終了させていただきます。委員の皆様、大変お疲れさまでした。